

2009年度事業報告

1. がん知識・がん予防の普及啓発活動

【ピンクリボンフェスティバル事業】

・ピンクリボンフェスティバル事務局を10年度に朝日新聞社から日本対がん協会へ移管するための準備にあたった。そのため8年度末から協会職員2名を朝日新聞社へ派遣し、共同で事務局を運営することにより実施についてのノウハウを蓄積した。

10年1月には事務局移管を完了し実施に向けて運営している。

・09年5月の母の日から募集を開始したピンクリボンデザイン大賞は、合計13,167点の応募があり、最優秀賞はスマイルウオーク東京大会の会場で表彰した。またポスター化された作品は、東京・神戸・仙台の3都市で駅張りポスターとして掲出したほか、日本医師会の会員（17万5千部）にも配布した。

・シンポジウムは東京・神戸の2会場で開催。乳がん啓発の講演、患者向けの講演、ゲストの講演、パネルディスカッションという構成。参加者数は全体で2230人、どちらの会場も盛況で高い評価を得た。

スマイルウオークは例年通り、東京・神戸・仙台の3都市で開催。ウオーク参加者は合計で約12,800人に上り、過去最高の参加人数となった。

会場にはマンモグラフィ検診車を派遣し、抽選で乳がん検診を受診してもらった。さらに初の試みとして、自治体の協力により、その場で検診申込を受付ける窓口を設置した。

【リレー・フォー・ライフ事業】

・09年度は室蘭、宮城、さいたま、川越、横浜、静岡、岐阜、芦屋、高知、徳島、広島、福岡、大分、沖縄の14か所に広がり、去年の倍増となった。地域単位で開き、チームで24時間歩くこの催しは、ボランティアによる企画・運営が中心。全国で1000人を超す実行委員が開催にたずさわり、合計で26,000人が参加した。

・この催しの最大の目的であるがん征圧へ向けた資金集めの側面がようやく理解されはじめ、終了後に各地実行委員会から日本対がん協会に寄せられた寄付は合計で1,343万円にのぼった。寄付総額から経費を除き、協会本部へ寄せられた割合は大分の72.1%

のように高率の地域もあるが、まだまだ経費をかけすぎる実行委員会もある。結果的に平均の寄付率で見れば前年度の 44.1%から 30%に下がってしまった。米国が目標にする基準寄付率は 80~85%であり、今後もより多くの人たちにこの理解が深まるとともに、経費をかけずに寄付を増やす手法を考え出すことが、各地実行委員会および協会の課題といえる。

【その他のキャンペーン】

①ほほえみ基金

・10月に開催されたピンクリボンフェスティバル・スマイルウォークの東京、神戸、仙台の3会場、都庁都民広場などで日本対がん協会のブースを出展し、乳がん啓発パンフレットなどを配布した。また乳がん触診モデルを用いて自己検診のデモンストレーションを行った。

・検診従事者のためにマンモグラフィ技術講習会、乳房超音波講習会を開催。乳房超音波講習会は J-START による有効性の研究が最終年に近づくにつれ、検診現場からの要望が高くなってきたこともあり初開催となった（【研修】参照）。

・ピンクリボンバッジ、リストバンド、乳がんの小冊子などの啓発グッズを制作し、セミナー、イベント会場で来場者に配布した。

・乳がん啓発ツールである触診モデルも2機新調し、企業、保健所、学校、テレビ局など、より多くの施設へ貸し出すことができた。

②禁煙基金

・禁煙運動では、「たばこと健康問題 NGO 協議会」の構成団体として、5月31日（日）に東京で09年世界禁煙デー記念シンポジウムを開催した。09年のスローガンは「警告！たばこの健康被害」であった。

・たばこを止めたい人を支援するために「らくらく禁煙コンテスト」を大阪府立健康科学センターの協力で実施した。6週間で禁煙を目指すプログラム。年に2回の実施だが、第23回は930名が参加し、25.9%が禁煙に成功。第24回では652名が参加し、19.5%が禁煙に成功した。

③子宮頸がんキャンペーン

・子宮頸がんの普及啓発についてはワクチン導入という話題もあり、緊急な対応が迫られた。こうした事業を展開するにあたりその財政的基盤として、09年12月に「子宮頸がん基金」を設け、企業、個人に向け寄付を呼びかけた。

・4月12日、東京・有楽町マリオンで市民公開講座を開催した。母娘で参加してもらうことで、新聞・テレビ離れが進む世代に働きかけようという試みで、母娘のペアを募集した。女優の仁科亜季子さん、仁美さん母娘に登場してもらい、家庭の会話の中でがんのこと、検診のことが出てくることを紹介しつつ、家庭での「教育」の大切さを訴え

た。専門家として、今野良・自治医大さいたま医療センター教授、宮城悦子・横浜市立大病院化学療法センター長が講演、パネルディスカッションにも参加してもらった。

・若い世代への啓発は特に重要で、次の2点を実施した。

まずは看護学生。5月に北里大学看護学部のカリキュラムとして、3年生を中心に約2000人に、患者団体の代表である河村裕美さんに講義をしてもらったうえで、アンケート。さらに大学院で看護を研究する約10人と懇談し、共同で活動していくことになった。大学院生と患者団体とのコラボレーションは定期的につき、9月に静岡・御殿場で開催したリレー・フォー・ライフでは、大学院生たちが、自分たちで作ったクイズ形式の啓発ツールを使って、参加者に子宮頸がん検診の重要性を訴えた。看護学生を対象にした啓発では、聖路加看護大でも、今野教授を招いた研修会を開催した。

・続いての啓発は慶応義塾大や東洋大、上智大、国学院大、青山学院大など、首都圏の大学生たちで、子宮頸がんに関心をもった学生たちに対し、今野教授や河村さんらによる勉強会を6回開催した。大学生たちはその勉強内容をもとに、同世代に訴えかける啓発冊子を3万部作成。10月から11月にかけて、首都圏の大学の大学祭にあわせて配布しつつ、対面して子宮頸がんの啓発を図った。11月14日には明治大学の教室で主に大学生を対象にしたイベントを開いた。タレントの山田邦子さんと山田さんが率いるスター混声合唱団にも登場を願って、約600人の学生たちに楽しみながら子宮頸がんについて学んでもらった。

学生たちの活動はウェブの展開、さらなる勉強会の開催と続き、10年度には一般社団法人・リボンムーブメントとして組織化し、大学生3000人アンケート等の活動につながっている。

・広報活動としては、首都圏のUHF局が作る番組で、子宮頸がんが若い女性に増えていること、検診でがんになる可能性のある「前がん病変」で見つけられること等の啓発を行ったほか、女性を対象にした週刊誌・月刊誌等にも働きかけ、子宮頸がん検診の重要性をアピールする特集記事の掲載につながった。

④がん教育基金

・検診受診率が低く死亡率が増加している一因として、わが国ではがんやがん検診に関する教育が実施されていないことが挙げられる。そこで09年12月に「がん教育基金」を設けて企業並びに個人に寄付を呼びかけ、がん教育事業をスタートすることにした。

最終形としては、がんや検診について分かりやすく解説したDVDや冊子を作成し全国の中学生に全員無料配布することである。また希望する学校を対象に医師やタレント

を動員し、課外授業を実施することも考えている。

「基金」は順調に増え、10年度に事業の一部をスタートできそうである。

⑤国際交流

・がん征圧を目指す国際組織、国際対がん連合（UICC）が提唱する「世界対がんデー」（毎年2月4日）の行事を毎年、実施。09年度も、10年2月4日（木）に、がん研究振興財団国際研究交流会館ホール（東京築地の国立がん研究センター内）で、「UICC世界対がんデー公開シンポジウム＝がん予防は子どもから＝」を、UICC日本委員会主催、当協会共催で実施した。

【啓発セミナー】

①全国巡回がんセミナー

・全国巡回がんセミナーを全国3か所で開催した。松山市（6月26日）は270人、和歌山市（9月11日）は280人、鹿児島市（10年2月21日）は280人が参加した。和歌山市ではセミナーの冒頭、協会のほほえみ大使であるアグネス・チャンが登壇し、自身の乳がん体験を語り好評を博した。その講演内容は朝日新聞や地元紙に採録された。

②朝日がんセミナー

・朝日新聞社との共催で、9月5日（土）に東京で、9月12日（日）に大阪で「朝日がんセミナー」を開き、東京会場638人、大阪会場807人の計1,445人が参加した。

③日本癌学会市民公開講座

・日本癌学会学術総会の一環として、同学会、朝日新聞社と共催で市民公開講座「がん医療の今、未来」を10月3日（土）にパシフィコ横浜国立大ホールで開催、約1000人が参加した。

④ブルークローバー・キャンペーン

・前立腺がんの知識普及のため朝日新聞社などと連携し9月6日（日）に札幌市の北海道経済センターで、ブルークローバーキャンペーン2009シンポジウム「がんを知ろう～前立腺がんの検診から治療まで～」を開催し350人が参加した。

【情報発信】

・ホームページのトップページのデザインを10年4月に変更するべく、準備を進めた。季節折々の写真をやめ、協会の活動に係る写真に変更した。また、項目数が増えすぎて見づらくなっていたため、トップに掲載する項目数を減らした。

この変更で、ホームページにアクセスした人が、画像を通じて、対がん協会の活動を知ることができる内容になった。

・月に1回発行している「対がん協会報」では、協会が各協力団体の協力を得て実施しているアンケート等の調査を紹介することを心がけている。アンケートは厚生労働省側

と内容を調整しているものもあり、がん検診を中心に政策立案にも大きく貢献している。また出来る限り時宜に即した記事の掲載をしているほか、協会のほほえみ大使であるアグネス・チャンさんによるインタビューシリーズも回を重ね、多くの読者から好評を得ている。

第1回のリレー・フォー・ライフから3年目を迎えた09年は、開催が14カ所と急増した。今後も増えることが確実なため、リレー・フォー・ライフ特集の作成を進めた（発行は10年5月付）。こんごも毎年、特集を作成し、普及に役立てる。

2. 専門家・専門団体向けの支援事業

【がん検診車無償貸与事業】

・検診機器整備では財団法人 JKA から 4,252 万 5 千円の補助金を受け、協力団体の自己負担金 6,436 万 5 千円を加え計 1 億 689 万円で、宮城県の胃部検診車と石川県の胸部検診車を製作した。

【研修】

①大腸がん検診制度向上研修会

・大腸がん検診従事者を対象に、精度管理を高めることを目的とした大腸がん検診精度向上研修会をはじめ開催した。1月15日に東京・有楽町マリオン朝日スクエアで実施し、全国の協力団体より24人が参加した。この研修で情報や課題の共有ができたので、今後も定期的に開催することを確認した。

②マンモグラフィ研修会

・マンモグラフィ研修会は、2月12～14日に癌研究会交流センターで開催、50名が参加した。受講者はマンモグラフィ検診精度管理中央委員会の実施する試験を受け、A評価、B評価は計43人と好成績だった。

③乳房超音波研修会

・財団法人結核予防会と共催で、乳房超音波研修会を09年度はじめて開催。2月20～21日に東京都清瀬市の結核予防会結核研究所で実施し、48人が参加。受講生は、JABTS（日本乳腺甲状腺超音波診断会議）の実施する実力評価試験を受けた。

④保健師・看護師研修会

・がん検診の第一線で働く保健師、看護師を対象にした研修会を3月4～5日、東京・有楽町マリオン朝日スクエアで開催、全国協力団体から64人が参加した。

⑤放射線技師研修会

・放射線技師研修会は、財団法人結核予防会と共催で3月11～13日、東京都清瀬市にある結核予防会結核研究所で実施、49人が参加した。

【表彰】

・平成21年度の「日本対がん協会賞」を個人7人と2団体に贈呈した。受賞者は、個人の部が、加藤哲郎氏（秋田大学名誉教授）、鎌田七男氏（広島大学名誉教授）、真田勝弘氏（総合病院土浦協同病院名誉院長）、添田實氏（宮城県塩釜医師会理事）、武内久仁生氏（兵庫県健康財団顧問）、中村郁夫氏（熊本県総合保健センター名誉所長）、中村良文氏（鳥取県保健事業団健診センター嘱託）。

団体の部は、青森県鶴田町と石川よろこびの会。

また、同賞の特別賞「朝日がん大賞」の第9回受賞者には、浅香正博氏（北海道大学病院長）が選ばれた。

【助成】

①若手医師奨学制度

・がんと取り組む若手医師に半年間、奨学金を提供する制度を引き続き実施し6名に計550万円を支給した。医師6名は癌研有明病院、愛知県がんセンターで研修を受けた。

②地域連携に支援

・在宅治療が増える時代に合わせて09年度はモデル事業として、東西3カ所（高知、大阪、福島）で始めた地域の連携やボランティア支援事業に132万円を助成した。

3. がん患者サポート事業

【がん相談事業】

①がん相談ホットライン

・09年度の相談事業は、前年度に引き続き外部からの要請にも応える形で業務拡大をはかった。チームは相談以外に各地に出張しての啓発活動も増えているため、引き続き全体の呼称を「相談支援室」として支援態勢を強めている。

・がんの無料電話相談「がんホットライン」は、10年1月より土曜日の相談を始め、これを機に月～金を含めて2時間延長して午後6時までとした。相談員も9人から17人に増員した。案内リーフレットは全国のがん診療連携拠点病院、図書館、保健所などに加えて行政やクリニックにも増やして送付、よりきめ細かい普及をめざした。その結果、相談件数は前年度比117%の6,837件になった。

・ホットラインチームは、電話相談以外に協団法人の職員や顧客向けにがん知識の普及と啓発を続け、ミニ講演などに11回出向いた。

②医師による相談

・厚生労働省の委託事業である医師による相談は、面談、電話とも昨年度からの態勢を維持し、全国で計1516回（面談1141回、電話375回）にのぼり、3,077人の相談を受けた。このうち東京での相談は457回、1,752人、ほかに協会独自の医療電話相談も43回、251人に実施した。

【セミナー・育成事業】

①美容セミナー

・資生堂の技術協力で、がん体験者を対象にした美容に関する困りごとを解決するセミナーを8回開催、プロからの情報提供だけでなく体験者同士が気持ちを分かち合う場にもなった。引きこもりがちな患者さんへの支援をめざした。

・またほほえみ基金を活用した美容セミナーも開催。これも資生堂の協力で、乳がん患者・治癒者を対象に5月と10月の2回開催し、22名が参加して眉の書き方、シミのカーバ法を学んだ。

②ネットワークングセミナー

・3月26、27日の両日、全国のピンクリボン活動団体（主に患者団体）の中で、比較的小規模で資金やマンパワーが不足している10団体を東京に招へいし、そのソリューションを得るための「ピンクリボンネットワークングセミナー」を開催した。乳がん検診受診率向上を目指し、参加団体と同じ地域の6つの協力団体から職員参加した。

4. がん研究支援事業

①がん臨床研究推進事業

・厚生労働科学研究「がん臨床研究推進事業」のうち、厚生労働科学研究費を受けた研究者が、研究成果普及のための研修会や発表会を、専門家向け、一般向け合計で64回開催した。

また、一般向け乳がん啓発のための冊子「もっと知りたい乳がん」の改訂版を12万部作成した。冊子は、全国のがん診療連携拠点病院などを通して広く配布した。

②がん対策のための戦略研究

・06年度から10年度までの5年間の予定で実施している厚生労働科学研究「がん対策

のための戦略研究」を円滑に進めるための支援は4年目となった。「乳がん検診における超音波検査の有効性を検証するための比較試験」は、試験参加者の累積が6万人を超え、世界でも類をみない大規模臨床試験となっている。

また「緩和ケアプログラムによる地域介入研究」では、研究員の雇用・管理や、地域住民に対する緩和ケア講演会の開催を支援した。また運営委員会、倫理委員会、研究評価委員会など各委員会を開催した。

5. その他

①寄付の概要

・09年度の寄付は、前年の対がん協会50周年記念募集の反動から大きく落ち込むのではと危惧されたが、大口の法人寄付とほほえみ基金が順調でその貢献により、寄付総額は2億6,032万円に上った。前年比では88.9%だが、予算比では113.2%、3,032万円のプラスとなった。

・種類別内訳 10年度の予算作成に合わせて一般寄付と指定寄付に仕分けした。

≪一般寄付≫合計で1億3,708万円、対予算比91.4%

「個人寄付」は2,945万円で対予算比38.0%

「法人寄付」は9,335万円で対予算比144.7%

「RFL」は1,343万円で対予算比167.9%

「オンライン募金」は84万円で対予算比28.1%

≪指定寄付≫合計で1億2,324万円、対予算比154%

「ほほえみ基金」は9,324万円で対予算比129.5%、2124万円のプラス。

「子宮頸がん基金」は新規で3,002万円

「がん教育基金」は新規で128万円

「禁煙基金」は29万円に終わり、予算500万円には届かなかった。

・08年度と比べて、個人寄付が大きく落ち込んだ理由は、大口の香典返しがなくなったためである。逆に法人寄付は、大鵬薬品500万円×2回、三菱東京UFJ銀行1000万円、子宮頸がん基金への2000万円を加えたグラクソスミスクラインから計2500万円、キアゲン1000万円、ほほえみ基金へのワコール452万円、田中貴金属357万円が貢献した。

ピンクリボン運動の広がりとともに協会と事業提携を希望する企業が増加している。

現在、70社と覚書を交わしているが、ピンクリボンをシンボルにしてほほえみ基金への寄付が好調となる一因である。

②公益財団法人認定申請に向けた準備

・13年11月までに新制度への移行が義務付けられている公益法人改革について、09年度を通じて移行準備を進めた。2008年度末の理事会・評議員会で、公益財団法人への移行を目指す方針が承認されたことを受けて、09年4月、厚生労働大臣から、「最初の評議員の選任に関する理事の定める認可書」を取得、同認可に基づいて、10年2月に「最初の評議員選任委員会」を開催、15人の評議員を選出した。また、10年3月の理事会・評議員会で、定款変更案、事業区分案、役員報酬規程など、申請に必要な事項の承認を得た（10年5月7日、内閣府に公益認定申請を提出）。